

山形大学附属博物館と結髪土偶

山形師範学校「郷土室」

山形大学附属博物館は、山形師範学校郷土室を前身に持つ大学附属の教育研究施設である。山形大学は戦後すぐの昭和24年(1949)、山形高等学校、山形師範学校、山形青年師範学校、米沢工業専門学校および山形県立農林専門学校を母体として設立された。

師範学校は明治11年(1878)に開校し文翔館(当時県庁)前の大通りにあったが、明治34年(1901)に現在の緑町に移転した。建物は現在も残っており山形県立博物館分館教育資料館として山形県の近代教育を紹介している。建物は本館と一部を残し取り壊されたが、当時は師範学校の他、北辰寮や師範学校男子部附属小学校があり、この師範学校内に当館の前身となった「郷土室」があった。昭和初期、大恐慌の影響から農村の疲弊や思想上の不安に対して、子供たちの住む土地や風習に目を向けることで愛国心を育てようとする郷土教育が盛んになり、文部省では郷土研究施設に補助金を交付し、各地の師範学校には郷土室が整備された。

結髪土偶は寒河江出身

結髪土偶の出土地石田遺跡は、山形県村山平野西部の最上川沿いにある丘陵高瀬山の麓の低地、JR左沢線石田踏切付近にある。大正10年(1921)の村山軽便鉄道(左沢線)線路敷工事の際、遺物が大量に出土した。その後も、昭和55年(1980)の宅地造成の工事現場から弥生時代の再葬墓が見つかった。

大正時代末、石田遺跡から見つかった結髪土偶は最初寒河江市の大地主、安達又三郎氏が所蔵。当時、西村山郡では考古学が盛んになっており、発掘した遺物を展示するための「山形県郷土博物館」が大正13年(1924)に元西村山郡会議事堂に開館した(注1)。この山形県郷土博物館を設立した西村山郡教育会が発行したポストカード集「考古学参考品絵葉書」に結髪土偶が写るものがあり、タイトルから安達氏が所蔵していたことがわかっている。しかし、写真に左脚は写っておらず、安達家から山形県郷土博物館へ出品されたとき、同一のものと気が付かず、左脚は安達家に残されたと考えられる。

その後、山形県教育会は山形市内に教育会館を新築することを決定、その中に「郷土博物館」が設置された。展示物は山形県郷土博物館の資料を移管し、昭和2年(1927)に開館した。

しかし、終戦間際の昭和19年(1944)、山形県教育会館が海軍に徴用されることとなり、資料の移転先として、当時郷土博物館の運営に関わっていた長井政太郎(師範学校教諭)に保管が委託され、生物関係の資料以外一切を郷土室が受け入れた(注2)。

結髪土偶の上半身はこうして、安達家を離れ、西村山郡教育会の山形県郷土博物館に

出品、その後は山形県教育会館内の郷土博物館、そして師範学校郷土室へと居場所を変えたのである。

さて、終戦後師範学校は新制山形大学の教育学部となり、郷土室も昭和27年(1952)博物館法に基づき「山形大学附属郷土博物館」の名前で「博物館相当施設」に指定された。また、場所も旧男子師範附属小学校体操場に移し、資料5万点を備えた博物館として開館。しかし、その後教育学部は現在の小白川キャンパスに移転、博物館も同キャンパスに新築された図書館3階の一角に移った。

昭和53年(1978)、収蔵資料が県内外の多様な分野になってきたことから館名を「山形大学附属博物館」と改め、平成27年(2015)、図書館から現在の人文社会科学部1号館に移転し、現在に至る。

平成21年(2009)、山形大学附属博物館の改称30年を迎えた記念事業として博物館グッズ(ガイドブック、クリアファイルなど)を作製することになり、そのデザインに館を代表する収蔵品として結髪土偶が選ばれた。当時の館長丸山俊明は結髪土偶について「これならきっと博物館の人気者(mascot character)として開運のお守りとなり、人々を魅了するに違いない。」と語っている(注3)。

腰の部分は石膏復元だった

修復前、結髪土偶の右胸から背面にかけての欠損は石膏で復元されていた。黒っぽく彩色されていたため気づきにくいだが、この部分が石膏であること、そして当時の学生が復元した箇所であることは、当館発行の『40年のことども』に学生本人のエッセイが残されている。

「この土偶は、資料室の中でいつも寝ていた。私はこれを立たせたい、と考えたのである。」(注4)このように結髪土偶について書いたのは、昭和26年(1951)教育学部に編入学した加藤稔氏(のちに東北芸術工科大学名誉教授)である。加藤氏は在学中より県内各地の遺跡発掘調査に関わり、その後も40年余りにわたって県内考古学の発展に尽力した考古学者である。エッセイの中で昭和26年の秋から歴史実習室の縄文土器の接合や復元を始め、続いて結髪土偶に着手した、しかし腰を作ったところで長井政太郎教授からストップがかかり中途半端なままになったと回想している。

左脚との再会

會田容弘氏(昭和56年(1981)本学人文学部卒。現在、郡山開成学園郡山女子大学短期大学部地域創成学科教授)は子供の頃から考古学に興味を持ち、在学中は教育学部歴史学研究会考古部会に所属、加藤氏の指導を受けた。

會田氏が左脚に出会ったのは約40年前、加藤氏から土偶の研究を勧められたことがきっかけである。色々な遺跡の土偶を比べる中、親戚を介して遠縁にあたる安達家の資料

に出会い、この頃から頭の中では附属博物館の結髪土偶とくつつくのではないかと考えていたが、まだ学生だったため実現はしなかった。

その後、安達家の資料が寒河江市に寄贈され、たまたま會田氏がこれを知る機会があり、当館の結髪土偶の一部であることを指摘するに至った。

平成30年(2018)の夏、寒河江市教育委員会生涯学習課歴史文化専門員の大宮富善氏が小さな段ボールで作った箱を持って来館した。そのとき持参したのが結髪土偶の左脚である。

左脚との感動の再会は、郡山市から會田氏をお招きして同年7月27日に実現した。結髪土偶の刺突文が腰から脚に続いている点や、断面がスコップなどの道具が当たって割れたように見えることなどの説明を受け、結髪土偶の左脚だという実感を得ることができた。

結髪土偶が立ち上がるための準備

すぐに当館では結髪土偶を立ち上がらせたいと考え、そのための費用をどう用意するか検討した結果、前述したようにクラウドファンディングに挑戦することに決定した。修復の準備として、山形県埋蔵文化財センターへの実見および助言依頼や、東北大学総合学術博物館でX線CTによる事前調査などを実施。そして、寒河江市からの寄贈手続きが終わり大学の収蔵資料となった後、昨年1月の学長記者会見で左脚との再会を発表した。

(押野 美雪)

参考・引用文献

- 1) 山形県教育会編 1924「西村山郡教育会総集会並郷土博物館開館式」『山形県教育 第409号』P.84-86
- 2) 山形大学教育学部九十年誌編集委員会1968『山形大学教育学部九十年誌』P.827
- 3) 丸山俊明2009「館名改定30周年「結髪土偶」を館のマスコットに」『山形大学附属博物館報35』P.1-3
- 4) 加藤稔1994「わが附属博物館の黎明」『山形大学附属博物館 40年のことども』山形大学附属博物館P.19